

# 2018年度 つながろう東北報告書

メンバー：1年 蓮井茜、小島楓、杉山もも、  
島田朋哉、數寄詩織、三河はるか  
2年 谷口柚月、東井遥菜、小林祥

## 今回の流れ

つながろう東北とは、2013年に発足した東北ボランティアグループです。今回は今までと違い、被災地視察とうめばたけでのお泊り会の支援だけではなく、昨年参加したメンバーが行って感じたことを郷土料理とウイスキーの視点から調査をしに行きました。

### 全体スケジュール

- 4月 目的決め
- 5月 内容決め
- 6月 メンバー募集、  
事前説明会、  
企画書作成
- 7月 事前準備
- 8月 東北へ
- 9月 反省会、  
報告会準備
- 10月 報告会準備
- 11月 報告会



仙台駅にて撮影

# 大川小学校 被災地視察

見学先：大川小学校跡地  
〒986-0121  
宮城県石巻市大森字大平6番地



▲大川小学校校門前

## ●研修目的

“被災地を視察すること”  
私たちと同年代の方が多く亡くなった大川小学校に実際に訪れて、何かを感じたい。

## 日程・写真

- 4月 目的決め
- 5月 事前学習
- 6月 事前学習
- 7月 全体で事前学習
- 8月 視察
- 9月 報告書作成
- 10月 報告書作成
- 11月 報告会



▲昨年から今年にかけて新しく説明の入った看板が置かれていた



▲津波到達地点がわかる塀

## 大川小学校

私たちは宮城県石巻市釜谷山根にかつて存在した公立小学校である大川小学校を訪れた。

### ○事前学習

大川小学校は、東日本大震災で石巻市大川小学校生徒108人中68名死亡、6名行方不明で11名の教諭の内9名死亡、1名行方不明と大規模な被害を受けた小学校だ。

また地震発生から津波到達まで50分間の時間があつたにもかかわらず、最高責任者の校長不在下での判断指揮系統が不明確なまま、すぐに避難行動をせず校庭に児童を座らせて点呼を取る、避難先についてその場で議論を始めるなど学校側の対応を疑問視する声が相次いだ。

震災当日の教員らの避難誘導に加え、震災前の学校の防災体制や市側の指導のあり方も裁判で争われている。



### ○視察してみても

小学校の跡形もなく被害の大きさ、津波の恐ろしさを一瞬で感じた。周りには住宅もあつたはずが、今となつてはなにもない土地となつていた。私たちと同じ年代の多くの子供達が亡くなった大川小学校にいるとなんとも言えない喪失感に襲われたが、ここは多くの人に訪れるべきだと感じた。テレビなどの映像で目にするのと実際に目にするのではやはり少し感じ方が違うと思われる。7年という年月が経つたが、津波被害の痕跡ははっきりと残っておりこの出来事を風化させてはいけなさと強く思った。



▲震災前と震災直後の大川小学校

# 女川町被災地視察 ～被災率最大の町～

見学先：女川町役場及びシーパルピア女川  
〒986-2261  
宮城県牡鹿郡女川町女川浜字女川 178 番地  
KK-8 町区 1 画地



▲シーパルピア女川から眺める朝日  
元旦には毎年大勢の観光客が初日の出を見に訪れる

## ●研修目的

“被災地を見に行くこと”

今年初めて「つながろう東北」に参加する1年生のメンバーは、被災地を見に行きたいという強い思いがあった。しかし、当初の計画では、被災地視察やお話を聞いたりする予定がなかった。そこで自分たちで被災地視察を計画し、東日本大震災について考える機会をより充実させた。

## 日程・写真

- 4月 目的決め
- 5月 視察先の下調べ
- 6月 事前学習
- 7月 事前学習
- 8月 研修  
(町役場でのお話、シーパルピア女川の見学・説明)
- 9月 報告書作成
- 10月 報告書作成
- 11月 報告会

▼左から土井さん、今野さん、お二人が連携したからこそ今の女川がある。



## ●研修① 町役場でのお話

当初は、もともと復興商店街であったシーパルピア女川のお店の方にお話を伺う予定であったが、女川の復興は役場の方が中心となって行っているというお話を伺い、町役場の方にお話を伺えることとなった。

お話をしてくださったのは、女川町役場 産業振興課 公民連携室 主幹 土井英喜さん。初めて女川の地に足を踏み入れた私たちをととても丁寧に迎えてくださった。

## ○ 女川町の位置



女川町は、宮城県の東部に位置し、現在 6514 人が住んでいる。(2018 年 10 月 31 日現在)

面積は 65.35 平方 km で 35 ある市町の中で 24 番目と宮城県内でも小さい部類に入る。

海にも山にも囲まれている豊かな自然が特徴で、漁業とともに歩んできた。

(女川町ホームページより  
2018/11/1 調べ)

## ○ 東日本大震災での女川町の被害

女川町は東日本大震災で犠牲者・行方不明者数 827 人、被災率 85.4%と被災率が最大の自治体である。これは、原因の一つに女川の地形がある。女川町は前を海に、後ろを山に囲まれた自然豊かな地であったが、今回はそれが逃げ場をなくしてしまう結果となってしまった。

しかし、海とともに歩んできたのが女川だ。海と町を分断して喜ぶ人は女川にはいない。なくなってしまったから新しく作るのではなく、なくなってしまったからこそ今まで女川町で築き上げてきた歴史や営みを大事に考え女川町の復興を計画した。



## ○ 女川はどうやって復興した？民間と行政の協力体制

被災率最大の自治体、そんな肩書を持ってしまった女川町はどうやって復興したのだろうか。

復興するにあたって行政だけの力だけでは難しいと考えた町役場の方たちは、民間の方たちも入れて復興に取り組んだ。

同じビジョンに向けて公と民がそれぞれ得意なところを担う。そうして持続可能な地域経営の実現を目指した。

## ●研修② シーパルピア女川の見学

私たちは、宮城県牡鹿郡女川町にあるシーパルピア女川を訪れた。

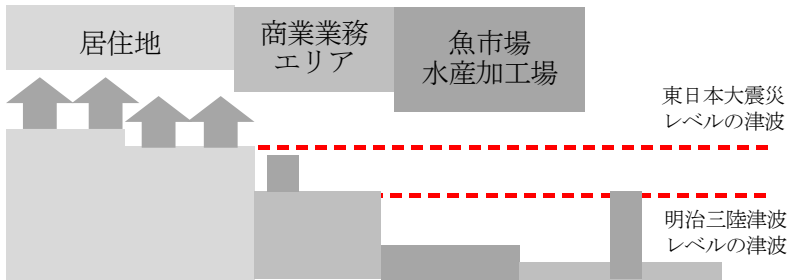
JR 女川駅を出るとそこには本当にここは被災したのかとおもうほど、とてもすてきな光景がひろがっていた。民間企業の今野さんにお話を聞きながらシーパルピア女川を回った。

### ○ 減災のまちづくり

シーパルピア女川の建物は、すべて木造であるそうだ。

これは、また津波が来たら流されてしまうため、あまり費用をかけず、被害を最小限に抑えるためであり、鉄筋を使わずに設計されたとのこと。

また、海が近いことから住民は一切この近郊には住んでおらず、入ることができる時間帯も18時までと決まっている。



▲シーパルピア女川の構造



### ○ 住民も観光客も訪れやすい地

JR 女川駅を出てすぐ郵便局と銀行を設置しており地域住民が利用しやすくなっている。

そして、レンタ道を歩いていくと住民向けの日常エリアから観光客向けの飲食エリア、体験エリアと続いている。

地域住民と観光客が一緒に賑わうことができる居場所が形成されているのだ。

## ●今回の経験を通して

女川町の様々な方々のお話を通し実際に見ることで、民間と行政のつながりがあったからこそ一体感のある町ができあがったのだと強く感じた。

地域の皆さんがとても前向きで、7年前の震災があったからこそ今の女川があり未来のためにこれからも女川町は成長し続け、さらに素敵な地になるのだと思った。

### 学生研修記

蓮井 茜

札幌大谷大学 社会学部  
地域社会学科 1年

#### 東日本大震災と向き合うということ

今回の「つながろう東北」での活動で困難に立ち向かった時に目をそらさないで向き合うことのむずかしさと大切さ、そして、東北に住む方々の強さを学びました。

初めて東北に行った際に感じたことは、普段の私たちとそんなに変わりのない生活しているということでした。私たちが快く迎えてくださった方々はみな明るい方ばかりで本当にこの地であのような災害が起こったのだろうかと思えました。しかし、それは東北の方々が震災と真剣に向き合っているからそう思うのだと思います。

例えば、女川の復興はただ無くなってしまったものを作り直すのではなく再び東日本大震災級の津波が来た時のことを常に考えて作られています。

今まで困難に立ち向かったとき、私はどうしてきただろうか。思えば目をそむけ時間が過ぎるのを待つことが多かった気がします。しかし、今回の活動で困難から目をそらさずに向き合うことが難しい、けれどそうしていくと良いほうに向かっていけるということ東北で出会った方々から学びました。

この学びを生かして今後の大学生を励んでいきます。



# 宮城県の郷土料理

研修先：まちの寄り合い所 うめばたけ

〒986-0872  
宮城県石巻市田道町1丁目15-2  
市民協いしのまきハウス



うめばたけにて撮影した集合写真

## ●研修目的

宮城県は震災の被害にあい、多くの住民がその土地から離れ避難したため、人口が減り子どもが少なくなっており、伝統文化が途切れつつある。そこで住民の最も身近であったらう郷土料理に目を付け、私たちから身近な人たちに広めることで、伝統を残していけるのではと考え目的とした。

### 日程・写真

- 4月 目的決め
- 5月 内容決め、企画書作成
- 6月 企画書作成
- 7月 事前学習  
(宮城の農業と郷土料理について)
- 8月 研修
- 9月 報告書作成
- 10月 報告書作成
- 11月 報告会

写真①→ずんだ団子  
写真②→ほや  
写真③→作った郷土料理

写真①



写真②



## ●総括

今回、うめばたけさんのご協力のもと、おくずかけ・ホヤの酢の物・石巻焼きそば・ずんだ団子、の4品のレシピと、作っていく中でコツや知識なども教えていただいた。レシピを教えてくださいました方は、直接親からレシピを教えてもらったのではなく、「親が作っているところを見て学んだ」と聞いて、昔から伝えられてきた伝統ある家庭の料理なのだと、身を持って感じる事ができた。レシピだけではなく、震災当時の様子を聞くことができ、被災者の生の声を聞くことができた貴重な体験となった。

このレシピを、まずは私たちから身近な人たちに伝えていき、伝統が途切れないようにつなげていけたらと思う。また、郷土料理を通して宮城に興味を持ってもらうことで、薄まりつつある東日本大震災への関心も持ってもらえたらと考えている。

### 学生研修記

谷口 柚月

札幌大谷大学 社会学部  
地域社会学科 2年



### 人から人へ

今回私たちは宮城県石巻市にある、まちの寄り合い所 うめばたけさんに協力していただき、地元の方に郷土料理のレシピを教えて頂きました。

昨年つながろう東北に参加した際、自分には何が出来るのだろうと考え、調べていく中で、震災があったため人口減少が進んでおり伝統的なお祭りなど伝統的な文化が途切れてしまっていることを知りました。そのことから宮城にある伝統がなくなってしまう前に自分たちが次の人へと伝えられないかと考え、一番人々のとって身近であった郷土料理であれば、その地域についても知ることが出来るのではないかと考え、今回郷土料理を選びました。

実際に作っていく中でやはり北海道とは違い、地域で採れるものを使って昔から作っていたということがよくわかりました。また、レシピを教えてくださいました方と調理をしているときや出来上がった料理を食べるときにお話を聞かせていただき、郷土料理を作ってきたからこそその知識などを知ることができました。

伝統は人から人へ受け継がれてきた、人と人がつながってできたものです。私は北海道の郷土料理もそうですが、地域のお祭りなどにも目を向け、他の人にも、もっと地域の伝統に興味を持ってもらえたらと思います。



### うめばたけとは

世代間、地域住民、外国人などの交流を楽しむ場所を提供するとともに、会員が得意な技術、知識、情報を共有し、相互に協力し、助け合うコミュニティづくりと生きがいづくりを行う。図書館も隣接しており、本の貸し出しも行っている。

# ニッカウキスキー 仙台工場見学

見学先：ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所  
〒989-3433  
宮城県仙台市青葉区ニッカ1番地



ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所工場内にて

## ●研修目的

近年大災害が続く日本において、ソーシャルコミュニティと地方の衰退は、大きな社会問題となっている。そのため、本研修では観光庁の推進する「酒蔵ツーリズム」に倣って、地域ブランドのニッカウキスキーによるまちづくりの可能性を模索することを目的とした。

## 日程・写真

- 4月 目的決め
- 5月 事前研究の下調べ
- 6月 事前学習  
(ウイスキーについて)
- 7月 事前学習  
(酒蔵ツーリズムについて)
- 8月 研修
- 9月 報告書作成
- 10月 報告書作成
- 11月 報告会

写真①→ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所 試飲所にて  
写真②→ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所 蒸溜工場前にて

写真①



写真②



## ●総括

2011年3月11日14時46分、東北をとつともなく大きな揺れが襲った。東日本大震災一。福島第一原発の事故では、プルトニウム、メルトダウン、セシウムなどといった初めて聞く言葉が並び、相馬をはじめとする東北の多くの地域で、住民が生活に不安を抱き県外に移り住んだことを前年度の同プロジェクトで強く実感した。

それに伴い、私たち学生はこの人口減少という社会問題を、重く受け止めその対策として、地域コミュニティの創造方法を模索している。そこで私たちは地域資源を活用したコミュニティ創出の方法として、観光庁が推進している『酒蔵ツーリズム』を模したウイスキーによるまちづくりができないかと考えている。

そのため、今年度は事前学習を行い、ニッカウキスキー宮城峡蒸溜所へ実際に訪れ、フィールドワークを行ってきた。

## 学生研修記

### 小林 祥

札幌大谷大学 社会学部  
地域社会学科 2年



### ニッカウキスキーでまちづくりを

今回私たちは宮城県仙台市にあるニッカウキスキー宮城峡蒸溜所に訪れました。現地に訪れて思ったことは、北海道のように空気が澄んでいたことです。その他にも見学を行い、ピート（泥炭）による香りづけや蒸溜方法、貯蔵方法まで多くのウイスキーづくりへのこだわりを体感しました。

近年、北海道観光局で推進されている「酒蔵ツーリズム」では増毛町の国稀酒造や新十津川町の金摘酒造といった日本酒蔵がまちづくりに力をいれています。それに倣い今回私は、ニッカウキスキーを地域ブランドとして、コミュニティ創造やまちづくりが行えないかと考えました。

今回の研修では実際に宮城峡蒸溜所を訪れ、ウイスキー消費量が多い宮城県におけるニッカウキスキーのブランド力を見て学ぶことができました。特に、シングルモルト『余市・宮城峡』が地域ブランドとしての要因を引き立てているのと感じ、北後志管内における「北海道創生総合戦略」の鍵となるのではないかと思います。

今後は、2018年11月に余市まで延伸した高速道路札樽道を利用した観光客やインバウンド客を巻き込んだニッカウキスキーによるまちづくりの可能性を視野に理解を深めていきたいです。

### ニッカウイスキーの豆知識

ニッカウキスキーの余市工場と仙台工場では、蒸留器の熱し方が違います。余市では石炭を使った直火式ポットスチル（蒸留器）を仙台工場では、機械によって精密に温度が保たれるヒーターによるスチーム関節蒸留機（左写真）を使用しており、これにより、ハイランドとローランドの味わいを生んでいます。

